

研究報告

看護学生の臨地実習前後の社会的スキルの変化と 実習中における人とのかかわり

Relations between people in the training and the change of social skills before and after clinical practice of nursing students

下村 美佳子 (Mikako Shimomura)* 和田 恵 (Megumi Wada)**
時長 美希 (Miki Tokinaga)***

要 約

本研究は、看護学生の臨地実習前後の社会的スキルの変化と実習中における人とのかかわりについて明らかにし、今後の実習指導の在り方への示唆を得ることを目的に、A看護専門学校2年生53名を対象として調査した。成人看護学実習前後の社会的スキルの変化については、菊池の社会的スキル測定尺度Kiss-18を用い、実習における人とのかかわりについては、自由記載によって調査した。

回収された調査票のうち実習前後の対象コード番号が同一であった49名を分析対象とした（有効回答92.4%）。その結果、実習後は社会的スキルが向上しており【患者と信頼関係を築けた】、【患者とかかわり人間の生き方について考えた】、【患者理解と援助効果を実感した】、【看護師から指導を受け、自分を認めてもらった】、【看護師との関係性に苦労した】、【グループ活動でメンバーとよい関係ができた】、【グループ活動で苦悩を感じた】、【教員の指導により達成感を得た】という人とのかかわりを体験していた。

実習の指導教員は、グループメンバー間の調整、患者とかかわり方や学生が看護師から助言や指導を受けやすい環境づくりをすることにより学生を支援していくことが示唆された。

キーワード：看護学生 臨地実習 社会的スキル

I. はじめに

近年、若年層においては少子化や核家族化・IT機器の普及により、他者との関係を築く機会が縮小している。このような背景は、人間関係を希薄化させ、コミュニケーション能力などを含む社会的スキルが低くなる要因を作っていると考えられる。社会的スキルは統一的な定義はないが、「他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身につけた技能」と理解することができ¹⁾、対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル（技能）を指して使われることが多く²⁾看護を実践するためには必須のスキルである。

しかし、看護を学ぶ学生の多くは青年期の途

上にあり、多くの者が核家族の中で育っており、生命の誕生や死を身近に経験することがほとんどない。小児や高齢者との生活体験をした者も少ない。また、現代の看護学生は家族以外への挨拶状況や社交性は低下しており、人との関係性は希薄化している³⁾との報告もある。このような看護学生が、臨地実習においては性別や年齢の異なるあらゆる健康のレベルにある対象者に接し、看護を展開していかなければならない。

社会的スキルは、日々の日常生活の中で、さまざまな人間関係の体験を通じて獲得され⁴⁾、年齢とともに上昇する⁵⁾。また、学習性のものでありトレーニングにより身につくものといわれている^{6)~8)}。社会的スキルが実習前に比べる

*龍馬看護ふくし専門学校

**元龍馬看護ふくし専門学校

***高知県立大学看護学部

と実習後は有意に向上していたという調査結果もみられ⁹⁾¹⁰⁾、臨地実習は学生にとって、社会的スキルを培う機会になっていると考えられる。社会的スキルは、看護実践者として成長していくために必要であると考えられ、学生は、実習の中で、患者・家族・医療従事者・実習指導者等、様々な人とかかわる体験をしながら他者と対人関係を円滑に運ぶための力や相互作用を巧みに行う力を身につけていると考えられる。

そこで、本研究では、看護学生の成人看護学実習前後の社会的スキルの変化と実習中における人とかかわりについて明らかにすることによって、学生の人とかかわりの特性を理解し、今後の実習指導のあり方への示唆を得ることが出来る考えた。

II. 研究目的

看護学生の成人看護学実習前後の社会的スキルの変化と実習中における人とかかわりについて明らかにし、今後の実習指導のあり方への示唆を得ることを目的とする。

III. 研究方法

1. 調査対象者

A看護専門学校（3年課程）の2年生53名を対象に調査

2. 調査期間

臨地実習前調査2013年5月～臨地実習後調査2013年7月の8週間

3. 用語の定義

社会的スキル：他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身につけた技能であり、対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル（技能）

4. 調査方法

1) 若者の社会的スキルの全体像を把握するのに適している菊池の社会的スキル測定尺度（以下Kiss-18）¹¹⁾を用いて実習前後の社会的スキルを調査した。Kiss-18は、1. 初歩的なスキル、

2. 高度のスキル、3. 感情処理のスキル、4. 攻撃に代わるスキル、5. ストレスを処理するスキル、6. 計画のスキルからなり、18の質問項目から構成されている。評定は「いつもそうでない」を1点～「いつもそうだ」を5点の5段階で、得点の範囲は18点から90点で、得点が高いほど社会的スキルが高いとする。

2) 実習中に印象に残った人とかかわりについて200字程度で自由記載をしてもらった。

5. 分析方法

1) Kiss-18は4 Stepsエクセル統計Statcel13を使用し、ウィルコクソン符号順位和検定にて実習前後の社会的スキルを比較した。有意水準は5%とした。

2) 実習中に印象に残った人とかかわりについての自由記載の内容をデータとし、学生の人とかかわりについて分析した。類似性に基づいて帰納的に分析し、コード、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象度を上げた。分析過程では研究者同士が分析を繰り返し検討し信頼性と妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

本研究は、A看護専門学校における運営会議で倫理的側面における審査を受け、承認を得た。

社会的スキル測定尺度使用許可については、尺度開発者の使用を商業目的外には自由に使用してよいとの旨を確認した（尺度の開発者が所属する一般社団法人 社会評価システム研究所）。

学生には研究への参加は自由意志であることを保証した。また、拒否した場合でも学業成績に影響しないこと、調査票には対象者のみが知るコード番号を記してもらうことで匿名性を保持した。研究概要について、文書と口頭で説明し、同意書の提出を持って同意が得られた者を対象とした。調査票と同意書は、研究概要説明時に配布し、同意の得られた者のみその場で回収した。

IV. 結果

調査票を53名に配布し、回収された調査票のうち実習前後の対象コード番号が同一であった

49名が分析対象となった (有効回答率92.4%)。

1. 対象者の概要

性別は男性11名 (22.5%)、女性37名 (75.5%)、無回答1名 (2%)であった。年齢は10代30名 (61.2%)、20代11名 (22.5%)、30代6名 (12.2%)、無回答2名 (4.1%)、学歴は高卒36名 (73.6%)、短期大学卒6名 (12.2%)、大卒6名 (12.2%)、無回答1名 (2%)、仕事の経験は、ありの者が13名 (26.6%)、なしが35名 (71.4%)、無回答1名 (2%)であった。アルバイトの経験は、ありの者が43名 (87.8%)、なしが5名 (10.2%)、無回答1名 (2%)であった。

2. 社会的スキル尺度得点 (表1参照)

実習前後の社会的スキルの尺度合計得点平均値 (以下合計得点平均値) と標準偏差は、実習前が 57.18 ± 6.54 に対し、実習後は 59.32 ± 7.40 であり、有意に実習後の得点が高かった ($p = .00$)。

質問項目5の「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」 ($p = .03$)、質問項目15の「初対面の人に、自己紹介が上手にできますか」 ($p = .04$)、質問項目7「こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか」 ($p =$

.02)、質問項目9「仕事 (学習) をするときに、何をどうやったらよいか決められますか」 ($p = .03$)、質問項目12「仕事 (学習) の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか」 ($p = .00$) の得点平均値が実習前に比べ実習後は有意に上昇した。質問項目16「何か失敗した時にすぐ謝ることができますか」 ($p = .01$) の得点平均値のみ、実習前に比べ実習後有意に低下していた。

3. 実習中における人とのかかわり (表2参照)

実習中に印象に残った人とのかかわりについての自由記載から抽出されたデータは、8カテゴリーに分類された。以下カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >で、表示する。

なお、人とのかかわりについての記載の人数は限定していない。

抽出されたカテゴリーは【患者と信頼関係を築けた】 【患者とかかわり人間の生き方について考えた】 【患者理解と援助効果を実感した】 【看護師から指導を受け、自分を認めてもらった】 【看護師との関係性に苦労した】 【グループ活動でメンバーと良い関係ができた】 【グループ活動で苦悩を感じた】 【教員の指導により達成感を得た】 であった。

表1 実習前後の社会的スキル得点の比較

質問項目		実習前得点 平均値	中央 値	実習後得点 平均値	中央 値	p値
初歩的なスキル	1 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか	3.28±0.76	3	3.42±0.67	4	0.14
	5 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか	3.08±1.13	3	3.36±0.95	4	0.03 *
	15 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	3.14±0.86	3	3.32±0.82	3	0.04 *
高度のスキル	2 他人やってもらいたいことを、うまく指示することができますか	3.08±0.86	3	3.18±0.72	3	0.34
	10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか	3.08±0.86	3	3.26±0.72	3	0.11
	16 何か失敗したときに、すぐ謝ることができますか	4.12±0.66	4	3.89±0.82	4	0.01 *
感情処理のスキル	4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	3.08±0.70	3	3.12±0.73	3	0.69
	7 こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか	2.95±0.79	3	3.22±0.69	3	0.02 *
攻撃に代わるスキル	13 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	3.22±0.95	3	3.14±0.92	3	0.43
	3 他人を助けることを、上手にやれますか	3.30±0.61	3	3.20±0.64	3	0.31
	6 周りの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	2.91±0.67	3	3.02±0.72	3	0.31
ストレス処理のスキル	8 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	3.26±0.86	3	3.26±0.88	3	1.00
	11 相手から非難された時にも、それをうまく片付けられますか	3.00±0.79	3	3.20±0.73	3	0.13
	14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	3.10±0.77	3	3.24±0.77	3	0.19
計画のスキル	17 周りの人たちが自分とは違った考え方を持っても、うまくやっていけますか	3.73±0.63	4	3.83±0.65	4	0.27
	9 仕事 (学習) をするときに、何をどうやったらよいか決められますか	3.06±0.87	3	3.28±0.84	3	0.03 *
	12 仕事 (学習) の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか	2.81±0.80	3	3.14±0.70	3	0.003 **
	18 仕事 (学習) の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか	3.10±0.91	3	3.34±0.80	3	0.05
社会的スキル得点の合計得点		57.18±6.54	57	59.32±7.40	59	0.001 **

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

表2 実習中における人とのかかわり

カテゴリー	サブカテゴリー
患者と信頼関係を築けた	患者とコミュニケーションが取れ信頼関係を築くことができた
	患者に看護技術を提供し信頼関係ができた
患者とかかわり人間の生き方について考えた	患者とかかわり人生観について考えた
患者理解と援助効果を実感した	自分の援助効果を知った
	患者理解や観察のためには知識が必要だ
	患者の援助は難しい
看護師から指導を受け、自分を認めてもらった	看護師から指導や助言を受けた
	看護師にケアを褒めてもらった
	看護師に優しい言葉をかけてもらった
看護師との関係性に苦労した	看護師の対応に苦労した
グループ活動でメンバーとよい関係ができた	グループ内で意見が言え、メンバーとよい関係ができた
	いろいろな考えがあることを知った
グループ活動で苦悩を感じた	人間関係にどうしたらいいかわからない
	グループ活動に疲れた
教員の指導により達成感を得た	教員の指導により実習目的が達成できた
	教員の指導により気づきがあった

【患者と信頼関係を築けた】とは、ベッドサイドにいき患者の話を傾聴しコミュニケーションを取ることや、看護技術を提供することで、患者と多くの時間を過ごし、患者と信頼関係ができたということである。＜患者とコミュニケーションがとれ信頼関係ができた＞、＜患者に看護技術を提供し信頼関係ができた＞が含まれる。例えば、「初めは話題がなく困ったが徐々に信頼関係が築けた」「じっくりかかわることで思いは聞けた」「傾聴と寄り添うことで患者の心を開くことができた」「清潔ケアを通じて少しずつ関係が築けた」と記述していた。

【患者とかかわり人間の生き方について考えた】とは患者とかかわる中で人生や生きることの意味について考えることができたということである。＜患者とかかわり人生観について考えた＞が含まれ、例えば、「患者とかかわり人生観の違いを大きく感じた」「患者の話により人間の強さや勇気をもたらした」との記述があった。

【患者理解と援助効果を実感した】とは学生が自分の援助が患者に影響を与えることを知り、援助のためには患者を理解する知識や観察が重要ということが分かったということである。＜自分の援助効果を知った＞、＜患者理解や観察のためには知識が必要だ＞＜患者の援助は難しい＞、が含まれる。例えば「自分の笑顔や声かけが患者に影響することを知った」「認知症

の患者が手を握り返してくれた」「無気力な患者とのコミュニケーションは難しい」「患者のニーズを満たす教育プランは難しい」「患者の個性を考えることができた」「患者の不安に対しての援助について勉強したい」という記述があった。

【看護師から指導を受け、自分を認めてもらった】とは看護師から患者へのかかわり方や援助について助言を受け、ケアだけでなく、自分自身を認めてもらったということである。＜看護師から指導や助言を受けた＞、＜看護師にケアを褒めてもらった＞、＜看護師に優しい言葉をかけてもらった＞が含まれる。例えば、「援助で悩んでいた時に看護師よりアドバイスを聞いた」「声かけやかかわり方を学んだ」「看護師にケアを褒めてもらい、実習をがんばろうと思った」「看護師がやさしく丁寧に目を見て声かけや話しかけてくれた」という記述があった。

【看護師との関係性に苦労した】とは学生は弱い立場にあり、看護師と関係性を結ぶことに苦労しており困難を感じている、ということである。＜看護師の対応に苦労した＞が含まれる。例えば「看護師の顔を伺い実習に専念できず残念であった」「看護師の対応に怖い思いをした」という記述があった。

【グループ活動でメンバーとよい関係ができた】とは実習中のグループ活動やグループカン

ファレンスによりメンバー同士が他者を理解し信頼関係を築くことができたというものである。〈グループ内で意見が言え、メンバーとよい関係ができた〉、〈いろいろな考えがあることを知った〉が含まれる。例えば、「最初は気まずかったが、今は大好きなメンバーだ」「勝手に苦手意識を持っていた」「メンバーの良い面が見え、ありのままの自分を出すことができ、メンバーとの仲を深めることができた」「グループ行動で、相手を知ることができた」「チームカンファレンスでいろいろな考えを知った」という記述があった。

【グループ活動で苦悩を感じた】とは、自覚や責任感がないグループメンバーに対して苦悩し、グループ活動に疲れたというものである。〈人間関係にどうしたらいいかわからない〉〈グループ活動に疲れた〉が含まれる。例えば、「グループ内で何もできない学生にどうしたらいいかわからなかった」「グループ内で人とかかわる難しさを感じた」「活動時、協力しない・発言をしない学生に対してどのように対応したらいいかわからない」「グループ内で連帯責任を取らなければならなかった」という記述があった。

【教員の指導により達成感を得た】とは教員の指導により、グループ内で発言ができるようになったり、アセスメントができるようになったことから、達成感のある実習ができたということである。〈教員の指導により実習目的が達成できた〉、〈教員の指導により気づきがあった〉が含まれる。例えば「教員の指導によりグループ内で発言・行動ができるようになった」「感性を大事にすることに気づいた」「教員の指導でアセスメントが見違えるようにできた」「教員のサポートで実習が楽しい」という記述があった。

V. 考 察

1. 社会的スキルの変化

本研究で実習を体験したA看護専門学校2年生のKiss-18の合計得点平均値は実習前に比べ

実習後有意に上昇していた。

石光らによる看護大学3年生の半年間の実習後の調査では、合計得点平均値 59.48 ± 8.4 を得ており、本研究とほぼ同値であるが、質問18項目中9項目上昇していた¹²⁾。それに対してA看護専門学校2年生は、実習後有意に向上したのは質問項目5・7・9・12・15の5項目のみであった。A看護専門学校の実習期間は成人看護学実習期間8週間の前後の比較であるのに対し、看護大学3年生は半年間という長期におよぶ実習前後の比較であったために社会的スキル獲得の相違が生じたと考えられる。

初歩的なスキルの質問項目5「知らない人でも、すぐに会話が始められますか」、質問項目15「初対面の人に、自己紹介が上手にできますか」は有意に上昇していた。学生は、実習初日、初対面の患者に自己紹介をし、受け持たせていただくことの同意を得ることを行って実習をスタートする。また、受け持ちが決まれば、毎日受け持ち患者の部屋を訪室し、コミュニケーションをとりながら患者の状態を観察し、情報収集し必要なケアを提供する。さらに毎日勤務交代するスタッフを探し、実習目標や行動計画を発表し、行動計画実践後の報告を適切に行っている。このように、受け持ち患者との間においては、患者に心を寄せ、患者の立場に立って声をかけたり、看護するために必要な情報を得るためのコミュニケーションを実習の中で行っている。また、看護師の気持ちを押し量りながら声をかけるタイミングを見計らったり、会話を続けていいのか等の判断を繰り返している。このような日々の看護実践における判断の繰り返しが初歩的スキルの向上につながったと考える。

計画のスキルの質問項目9「仕事（学習）をするときに、何をどうやったらよいか決められますか」、質問項目12「仕事（学習）の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか」が実習後有意に上昇していた。実習中、情報収集後に看護問題を抽出し、看護計画の立案、実施、評価と看護過程の展開を日々繰り返すことにより向上したスキルであると考えられる。

感情処理のスキルの質問項目7「こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか」は実習後有意に上昇していた。学生は<看護師の対応に苦労した>ことがあり、実習中、看護師の態度に困惑するが、次第に他者の感情を理解し、自分の感情を処理できるようになったことで向上したと推測される。

高度のスキルの質問項目16「何か失敗した時にすぐ謝ることができますか」は実習後有意に低下していた。実習中インシデントを起こした時、学生は引率教員から指導・助言を受け、レポートを作成しながら振り返りをするが、看護師や引率教員に指摘され初めてインシデントを起こしたことに気づく学生もいる。すべての学生がインシデントを起こすわけではないが、インシデントは学生にとって他者に迷惑をかけたこと、その状況に適切に対処できなかったという体験であり、この項目の点数の低下につながったと考えられる。

2. 実習中における人とのかかわり

【グループ活動でメンバーと良い関係ができた】については、実習中はグループ単位での行動が多くなり、毎日のグループカンファレンスが学生にとってお互いを知る良い機会となる。一方、【グループ活動で苦悩を感じた】が、グループカンファレンスで、メンバーとかがかわることが、他者理解や相互理解を深め、グループのメンバーとの信頼関係を築くことにより、意見交換ができるようになったと考える。

また、患者と初めて出会う実習初日に学生は緊張するが、実習を重ねるごとに初歩的スキルは向上し自己紹介の後、すぐ会話が始められるようになる。患者との毎日のコミュニケーションや援助を通じて信頼関係を築いていく過程で、【患者との信頼関係を築けた】と感じ、毎日患者とかがかわる中で自分自身が患者に与える影響を自覚し、より良い援助のためにはさらに知識を深め患者理解をする必要があることを認識するようになったことが、【患者理解と援助効果を実感した】につながり、【患者とかがかわり人間の生き方について考えた】となるまで学生は

実習を通じ、患者とかがかわることにより成長していったと考える。

現在の学生は、教員との関係は親密になっているとの調査結果¹³⁾もあるように、教員は身近な相談相手として学生と接している。学生は実習中に対人関係や看護技術に悩むことがあれば、教員に相談し、指導を受け実習を進めていく。本研究でも臨地実習中に教員の指導によりグループ間で発言や行動ができるようになり、アセスメントができるようになって実習が楽しいとの自由記載があった。学生はこの教員とのかかわりの中で対人関係を円滑にする技術を学び、自信を持ち、実習に積極的に臨むようになり、実習目的が達成されたことが、【教員の指導により達成感を得た】の抽出につながったのではないかと考えられる。

一方、臨地実習中に看護師とコミュニケーションがうまく取れる学生は少なく、その理由として「忙しそうだから」と感じる学生が多いという調査結果¹⁴⁾がある。学生は看護師にどのタイミングで声をかけたらいいのかと悩みながらも毎日、看護師に行動計画を発表し、実践した看護活動の報告をしなくてはならない。この時に、【看護師との関係性に苦労した】こともあったが、<看護師から指導や助言を受けた><看護師にケアを褒めてもらった><看護師からやさしい言葉をかけてもらった>という看護師とのかかわりから【看護師から指導を受け、自分を認めてもらった】という経験もしている。

3. 今後の実習指導の在り方

学生は【グループ活動で苦悩を感じた】、【看護師との関係性に苦労した】等、対人関係が難しいと感じていた。しかし、実習中、学生は人とのかかわりの体験を通じて、社会的スキルが向上し、グループメンバーや患者との信頼関係が構築され、看護師ともかがかわることができるようになり、看護師からもよい指導を受けることができ実習で達成感を得ることができるようになっていた。

実習の指導教員は、グループメンバー間の調整や学生と患者の双方より情報収集をし、患者

と信頼関係を築くことができるように学生に適宜助言をすること、また臨床指導者との連携・調整に努め、学生が看護師から助言・指導を受けやすい環境づくりをすることにより学生を支援していくことが示唆された。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究では、菊池のKiss-18と学生の自由記載から成人看護学実習前後の社会的スキルの変化と実習中の人とのかかわりについて明らかにし、今後の実習指導の在り方への示唆を得ることができた。しかし、対象者が53名とデータ数が少なく、成人看護学実習前後のみの調査結果である。今後は基礎看護学実習から成人・老年・精神・母性・在宅・統合実習後や卒業時までの学生の社会的スキルの変化の観察・評価方法を検討し、学生の社会的スキル獲得に向けて効果的な教育方法を明らかにしていくことが課題であると考えられる。

謝 辞

本調査にご協力いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。

<引用文献>

- 1) 相川 充・津村俊充：社会的スキルと対人関係、5、誠信書房、1998.
- 2) 菊池章夫：また思いやりを科学する、185、川島書店、1998.

- 3) 柳川育子・矢吹明子：現代看護学生の生活および気質の特徴第2報（次元別解析）1987年、2000年及び2009年の比較、京都一律看護大学紀要第36号、61-68、2012.
- 4) 相川 充：人づきあいの技術、148、サイエンス社、2000.
- 5) 菊池章夫：社会的スキルの心理学、177-183、川島書店、1998.
- 6) 小林重雄：子どものかかわり障害、55、同朋舎、1989.
- 7) Johnny L. Matson, Thomas H. Ollendick : Enhancing Children's Social Skills Assessment and Training, 佐藤容子他訳、子どもの社会的スキル訓練、14、金剛出版、1993.
- 8) 鈴木けい子・古賀典子他：実習による社会的スキルの変化－老年看護実習・精神看護実習前後の比較－、日本看護学会論文集、看護教育、31号、12-14、2002.
- 9) 前掲8)
- 10) 石光美美子・古谷剛他：看護大学生の半年間にわたる臨地実習前後の社会的スキルの変化、目白大学健康科学研究第5号、61-66、2012.
- 11) 堀洋道監修：心理的測定尺度集Ⅱ、170-173、サイエンス社、2005.
- 12) 前掲10)
- 13) 前掲3)
- 14) 渋谷えり子：臨地実習における看護師（指導者）－学生関係－学生側からの分析、第39回 看護教育、226-228、2008.